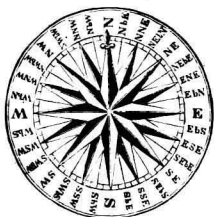


こ　　や
広野の旅人たち

川村たかし

——新十津川物語





偕成社の創作文学

こう や の 旅 人 た ち
広 野 ———新十津川物語

NDC 913 偕成社 252p 21cm 1979年

1978年10月 1刷

1979年 8月 8刷

著 者	かわ	むら	た	か	し
発行者	川	村	今	村	廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 の 5
TEL (03) 260-3221 (代) 〒162
振 替 東京5-1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社
多色印刷 小宮山印刷株式会社
製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-720170-0904

©川村たかし 鵜田 幹 1978

Printed in Japan

広野の旅人たち

—— 新十津川物語

川村たかし著／鵜田 幹絵



偕成社

広野の旅人たち／もくじ

第1章 石狩の川岸 いしかり かわぎし

1 思いがけない出会い 8

2 さいはての町で 17

3 照吉のなぞ てるきち 26

4 あわただしい夕べ 35

第2章 馬そりのすず ば

1 ふかまる冬 47

2 雪の初市 はついち 55

3 貧乏神 びんぼうがみ 64

4 小屋の中の男 73

第3章 兵村の夏 へいそん

1 第二大隊 第四中隊 83

2 カッコウ鳴いて 92

3 火を吹く木 102

4 フキのまよい 111

第4章 うねる大地

1 リンゴ売り 121



2 花嫁の馬そり 129

3 かえってきた家 140

4 たたかい 150

第5章 吹雪の下ふぶきの村

1 平作の離村りぞん 161

2 砂金掘りさきんほり 171

3 番外地のたよりばんがいち 180

4 ただよう馬そりば 190

第6章 北の川燃えてし

1 天の馬車 201

2 町が死んだ 212

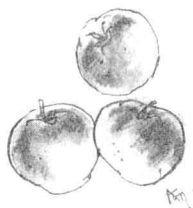
3 空をいく川 223

4 さびれる村で 236

あとがき 247

作家と作品について 野長瀬正夫のながせまさお





作者・川村^{かわむら}たかし

1931 年、奈良県に生まれる。奈良教育大学卒。
現在、五條高校教諭、日本児童文学者協会・日
本児童文芸家協会会員。主な作品には『川に
たつ城』『まぼろしのカステラ』『凍った猟銃』
『ふんどし校長』『熊野海賊』『おてんばショコ
ちゃん』『山へいく牛』『北へ行く旅人たち』
等多数。住所／奈良県五條市新町 2-1-14

画家・^{ときた}鶴田^{かん} 幹

1932 年、千葉市に生まれる。1959 年より田代
光氏に師事。新協美術会委員、白礫会会員。
毎年、油絵の個展、同人展その他を持ち、小
説文芸誌・新聞・児童誌に歴史ものの挿絵を
描く。主な作品『北へ行く旅人たち』『まぼろ
しの城』（絵本）。住所／千葉市南生実町 861

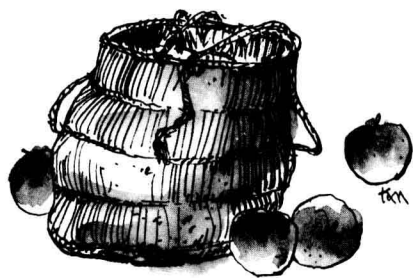
川村たかし
こうや
広野の旅人たち

——新十津川物語



第1章

いし かり の かわ ぎし 岸 石 狩



Ⅰ 思いがけない出会い

ざわっと空気がゆれたかと思うと、三人ばかりの男が大通りへとびだしてきて、つんのめった。どうやらおわれているらしい。

フキは小さなつつみを胸むねのまえにだきしめて立ちどまった。こわいことだ。まきこまれば、けがもしかねない。このごろ、けんかは毎日のことだった。通りには上川盆地かみかわぼんち（旭川を中心とする盆地）へむかう荷車にこまがつづいている。冬をまえに人や物がぞくぞくと北へむかっていた。

その荷車の一つにつきあたりそうになりながら、ひとりは大通りをつつきろうとし、ほかのふたりは南の砂川すながわのほうへとかけだそうとしたが、

「まてい。」

ぴしっとするどい声がからみついた。

フキは目をみはった。おってきたのは前田恭之助まえだきよすけ。

だった。古着屋の番頭ではやっていけなくなつて、いまは遊郭の用心棒になつてゐる。もと樺戸監獄の囚人だった恭之助は、みじかい木刀をつかみ、いっぽうの手は着物のすそをからげて、

「うごくな。」

無表情にいった。三人は顔を見あわせた。おつてきたのがひとりだとわかつたとき、三人はふてぶてしくむきなおつた。だが、恭之助はゆうゆうとしていた。たくみにふたりのにげ道をふさぐ。鼻の下のふといひげが、いきいきと黒かつた。

「用か。」

ほおにきずのある男が両手でえりもとをひろげて、

「金はないぜ。こんどまで借りところじゃねえかよう。」

あざわらうように肩をひねる。とたんに恭之助の木刀がさつとはねた。それほど力をこめたようでもなかつたが、

「ゲツ。」

きずのある男はわき腹をおさえてうずくまつた。のこりのふたりはふところから短刀をひきぬいた。

「よくもやったな。」

用心棒はにやつとわらつた。

「ほう、おもしろくなつてきた。そうこなくちや。」

やせた男がじりじりうしろへまわるのを気にもとめず、

「そうさなあ、てめえらのようなやつがあらわれんことには、こっちもおまんまの食くいあげよ。」
背せなかへだっとなつてくる男をひよいとかわしながら、

「えいっ。」

するどい気あいがふき出た。短刀たんとうがはじけとんだ。グチツと骨のおれるきみわるい音がして、
見ているフキは目をつぶった。

（おじさん、そのくらいにしたって。）

だが、こんどフキが見たのは恭之助きやうのすけが三番めの男にとびかかっていくすがただった。あおざめた顔に、目がどす黒いひかりをはなっている。肩かたをなぐられた男は地べたにくずれた。それでも恭之助はやめようとしなない。二すじばかりのしわをきざんだ顔には、もう笑顔えがほのひとかけらものこっていないくて、木刀は正確に三人をうちすえている。にぶい音と悲鳴ひのめいがいきりまじってきこえた。あたりは人の山だった。はじめは三人のならず者にとがった目をむけていた人たちも、「おや」というふうに恭之助につきささっている。これはあまりにも残酷ざんくだ。えものをなぶる狂犬きやうけんのようにむごたらしい。

フキはたまりかねてとびだした。いや、気がついたとき、彼女かのじょは恭之助にしがみついていた。
「おじさん、やめて。もうええやんか、死んでしまうやんか。」

いちどめはかたい木にでもぶつかったようにはじきとばされたが、二どめはふっと力がゆるん



だ。

「おおっ、フウちゃんか。」

「やめて、この人ら手むかいも何もしてへんやんか。」

恭之助^{きやうのすけ}はやっとわれにかえったふうだった。木刀^{ぼとう}がだらりとたれた。はじめて見物人に気がついたらしく、

「いったいった。金をはらわんで、けんかをふっかけてきたから、警官^{けいがん}のかわりをしたただけだ。」
それでもうごかないので、

「わっ。」

だしぬけにとびあがってみせた。おどろいた人びとがぱっとちった。ギーギー音たてて、荷車^{にぐろま}がうごきはじめた。

「そうだなあ、あやうく殺しちまうところだった。よくとめてくれた。」

恭之助はふっといきをはいた。そのときになって、三人の男たちがのろろとおきあがった。
きずのある男はわき腹^{はら}をおさえながら、

「ちくしょうめ、おぼえてろ。」

よろよるとにげていく。もうひとりが血だらけのつばをはきながらあとにつづいた。

「おい、どうした。立たんか。」

のこったひとりを見おろしながら恭之助がいったとき、フキはぎくつとした。地上にのびてい

るのは短刀たとうをかかえこんでつつこんでいったやせた男だった。さっきからどこかに見おぼえがあると思つていたのだった。念ねんのためによこへまわった。そしてフキの顔はみるみるあおざめた。

「おじさん、この人、おれの兄ちゃんやんか。」

「なんだと。」

が、つぎのしゅん間、彼女かのじょはおおいかぶさるように、けが人の上にしゃがみこんでいた。

「やっぱり兄ちゃんや。しっかりして、おれや。フキやよ、兄ちゃん。わかるか。」

男ははれあがつた顔をのろのろとあげた。まちがいもなく照吉てるきちだった。六年まえの冬、屯田兵えんてんへいの小屋から脱走だつそうした兄が、まるで見ちがえるようにおちぶれて、ここにいる。こけおちたほおに、ひげがこびりつくようにのびていた。にこった目をぼんやりあけて、

「フキやて？ フキがなんでこんなところにおるんや。開拓村かいたくむらにいったんとちがうんか。」

照吉は首をふりながら、からだをおこした。おれた右手をだきかえながら、

「新十津川しんとつかわにおるはずやないか。」

よく見ようとして、兄はうめいた。

「痛う、よくもやりやがった。」

それでも妹の肩かたに左手をのぼして、

「用があつてこの滝川たきかわにきていたんか。」

「いいや、豊ちゃんとよちゃんとこ火事になったもん、いまは三楽堂さんらくどうにおる。もう四年もまえからやで。」

「四年も——」

「そんなことより、兄ちゃんこそ札幌さっぽろで車ひきしてたんとちがうのか。」

「へん、あほらしいて、人力車じんりきしやなんかひけるかよ。」

立ちあがろうとして、照吉てるきちはまたもうずくまった。手首ばかりか背せなにもあばら骨ばねにも、恭きよう之助のすけの木刀のすけがくいこんだらしい。兄と妹はもつれあつてすわりこんだ。

「三楽堂さんらくどうとは中垣なかがきのおやじか。え？ あのがめついい男か。」

「そうや、兄ちゃんが三十円を借りた中垣のおじさんとこ。ついその四丁目くすりやで薬屋くすりやさんをやってんねん。けど、兄ちゃんはまだ——あほう。」

こんなすがたでといおうとして、フキはのどがつまった。六年ぶりに会うというのに、これではおれがかわいそうだとフキは思う。しぶんは女中じやうちゆうをしていても、兄はちがう。いまにえらくなつてむかえにきてくれると考えつづけてきた積み木きの城しろが、音たてて目のまえでくずれていた。そのくやしさがふきこぼれるようにほとばしかったが、やがて彼女かのじよは氣をとりなおした。こんなところ*ろ*にいつまでもぐずぐずしているわけにはいかない。

「歩けるの、しっかりして。」

「ちいっ、あのやろう見てろよ。」

照吉はおく歯をかみならした。フキは肩かたをかしてやろうとしてもつれた。

「まだそんなこというてんの。おじさんはの、監獄かんごくを模範もはん囚しゆうとしてつとめあげた人よ。一刀流いっとうりゆうの

名人なんよ。兄ちゃんがかなうはずないやんか。」

照吉はまのぬけた顔で妹を見た。一刀流いっとうりゅうときいてがっくりとなり「いたい」とうめいた。しかえしをする元気もなくなったとたん、からだじゅうのきずのいたみがきりきりともどってくるぐあいだった。

ろじの中からがらと音がして、ふたりのそばに荷車にぐるまがとまった。恭之助きょうのすけが立っていた。

「フウちゃん、そいつをここへのせよう。かじ棒ぼうをにぎってしておくれ。」

けが人はぬれたむしろでもひきずるように、車の上にひきあげられた。照吉はまだ、

「いたいぞこら、殺ころすならさっさと殺しやがれ。」

と、わめきつづけている。フキは腹はらをたてた。

「それぐらい、しんぼうしィ。やにこい（いくじない）男や。」

顔の上へたたきつけておいて、

「おじさん、兄ちゃんをどこへはこぶの。」

半分不安な目で恭之助をふりあおいだ。まだ滝川村たきかわには警察けいさつはない。しかし、兄を兵村へいそんの隊長

さんのところへとどけられれば大ごとだった。

「おまえの兄ぎとあらばほうっておくこともできまい。医者いしやのところまではこぼうと思って、米

屋の車をかりてきた。フウちゃんもあとできてやんなよ。」